

がんは増えているのか？

「産業保健21」編集委員、前(独)労働安全衛生総合研究所理事長 ● 小川康恭

「がん」が増えていると喧伝されているが果たして「がん」は増えているのか。国立研究開発法人国立がん研究センターが「がん統計」を発表している。「人口動態統計によるがん死亡データ（1958年～2015年）」（図1）と「地域がん登録全国推計によるがん罹患データ（1975年～2012年）」（図2）によりその実態を知ることができる。死亡率は全年齢層で考えると確かに増えているが、年齢区分別でみると85歳以上の区分を除けば近時着実に減少している。このことから、人口の年齢構成が高齢化していることを考慮するとがん死亡率は減っていると結論づけることができる。

他方、発症率は各年齢区分すべてで増加している。すなわち発症率は増加しているといえる。発症率が増加しているにもかかわらず死亡率は減少しているのは何故か。がん予防体制の充実は早期がんや軽症がんの発見率を増加させることは確かである。ここで、がんは増えているにもかかわらず早期がんの積

極的治療が死亡率を低下させているという考えと、早期がんといわれているものの中には放置しておいてもよいものが多く含まれているのでがんは増えていないのだという考えが出てくる。しかしながらどちらが正解というよりは両方が絡まり合いながら進んでいるのではないだろうか。

また、現実にはそれらの視点とは異なるもう一つの考え方が重要である。それは、発症率の増加が主として高齢者だからである。実際に臨床に携わっている医療者が経験し実践していることは、高齢者においては例え転移があったとしてもがんの進行は非常にゆっくりであることが多く、QOLを考えると積極的な治療は必ずしも最善の選択ではないということである。

今後人口の高齢化が進むと、がんは積極的に治療して初めて延命できるというイメージは少しずつ薄らいで行くのではないだろうか。

図1. がん死亡率の年次推移

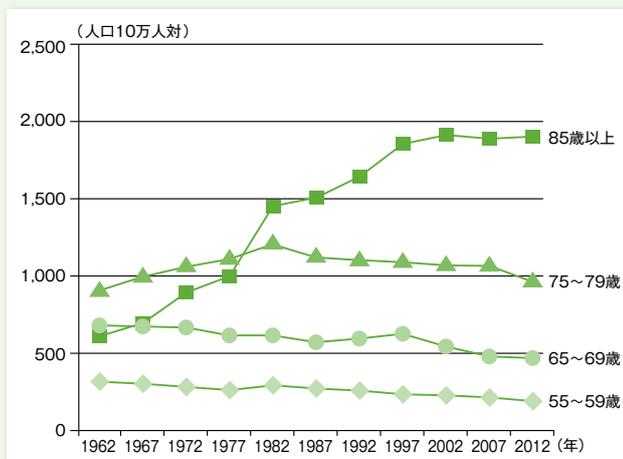


図2. がん発症率の年次推移

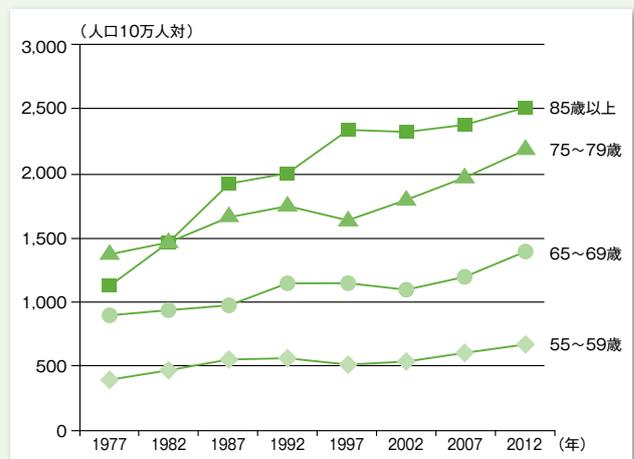


図1・2 出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」

編集委員 (五十音順・敬称略)

委員長 相澤好治 北里大学名誉教授
 小川康恭 前独立行政法人労働安全衛生総合研究所理事長
 加藤隆康 株式会社グッドライフデザイン技術顧問
 亀澤典子 独立行政法人労働者健康安全機構産業保健担当理事
 河野啓子 学校法人皖学園四日市看護医療大学名誉学長

興梶建郎 新潟産業保健総合支援センター所長
 武田康久 厚生労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課長
 浜口伝博 ファームアンドブレイン社代表／産業医
 東 敏昭 学校法人産業医科大学学長
 松本吉郎 公益社団法人日本医師会常任理事